

2016年3月 第45号
 三重県労働組合総連合
 〒514-0015 三重県津市寿町7-50
 みえ平和と労働会館
 TEL 059-223-2615 FAX 059-223-4495
 http://mieroren.labornet.jp/

みえ労連

ZENROREN

告知板

ご家族づれでご参加を
 「第87回三重県中央メーデー」
 主催：第87回三重県中央メーデー実行委員会
 日時：5月1日(日)午前10時00分開会
 場所：津市観音公園
 メーデースローガン『働くものの団結で生活と権利を守り、平和と民主主義、中立の日本をめざそう』
 メーデー合唱団のうたごえ、プラカードコンクール、パレードあり

大企業がため込んだ内部留保は300兆円

2016春闘 三重県国公が県内の内部留保を試算



三重版ビクトリーマップ

ビクトリーマップとは、各企業の内部留保を明らかにし、月2万円(時給約130円)(正規32万円、非正規24万円)の賃上げがすべての従業員に可能なことを地図で示したものです。



県内の主な大企業や商工会議所と懇談し、賃上げを申し入れます

表示内容

- 親会社名・企業名
- 内部留保額(子会社・持株会社を含む連結決算額)
- 月2万円の賃上げに必要な内部留保額の取り崩し率(%)
- (正規32万円、非正規24万円の賃上げ原資が必要となる率)
- 《2015年3月の有価証券報告書より》

内部留保とは・・・?

内部留保とは、企業の利益のうち、株式配当、役員賞与、税金などを払った上で、企業にため込まれている資産です。大企業は、大幅な優遇税制を受けた上で、このような膨大な内部留保を溜め込んでいます。

内部留保のほんの一部をとりくずすだけで、すべての従業員(子会社等を含む)に月2万円の賃上げが十分できます。従業員の生活改善を図り、安定した雇用を実現するため、内部留保を活用すべきです。

みえ労連の賃金・県民要求での懇談内容

- 1 全労連統一要求の「全国一律・時給千円以上」「全ての労働者の賃上げ、雇用環境の改善」についての見解を。
- 2 公契約条例が、昨年四日市市で、最近愛知県・岐阜県で施行されます。三重県および県内の現状について、意見交換を。
- 3 私たちの介護事業所総訪問も含め、国民すべてに関係する介護・社会保障の充実で意見交換を。
- 4 人口減少・少子高齢化に対する経営・雇用への影響、各自治体の地方創生施策への要望、地域の雇用情勢などについて、意見交換を。

日	時間	場所
3月22日	9時30分	県中小企業団体中央会
3月18日	11時	県経営者協会
3月17日	10時	伊勢商工会議所
3月17日	13時	鳥羽商工会議所
3月17日	15時	志摩市商工会
3月16日	13時	第三銀行
3月16日	13時	井村屋
3月16日	13時	松阪商工会議所
3月16日	13時30分	百五銀行
3月15日	9時30分	津商工会議所
3月15日	10時	鈴鹿商工会議所
3月15日	13時	亀山商工会議所
3月22日	16時	住友電装
3月16日	13時	太陽化学
3月16日	11時	三重銀行
3月15日	10時	四日市商工会議所
3月15日	10時	桑名商工会議所
3月15日	10時	北勢労連・桑員労連

春闘懇談日程(案)



地域から怒り、いのちを守る医療・介護の充実こそ！

第4回あすの三重を考える集いに325名が参加 (2月28日サンワーク津)



開会挨拶
西川洋実行委員長



会場いっぱいの参加者 2016年2月28日 サンワーク津



講演する長友薫輝教授
(三重短期大学)

2月28日(日) サンワーク津を会場に「第4回あすの三重を考えるつどい」が開催されました。

午前10時、若い二人の司会で始まった第1部では、「地域医療構想が動き出した」というテーマのもと、県内各地から報告がありました。

○藤井新一さん(民医連事務局次長)の基調報告

昨年成立した「医療介護総合確保推進法」で、県内8地域医療構想調整会議が設置され、医師会・病院長など関係者が議論されている。その中身は団塊の世代が後期高齢者になる2025年以降の医療費増大を抑制するため、病床を「高度急性期」「急性期」「回復期」「慢性期」に区分し、急性期から回復期へ転換、県内では「北勢412床」「中勢伊賀494床」「南勢志摩787床」「東勢州457床」と大幅に削減し、病床削減 在宅医療 介護・総合事業へと、安上がり医療・介護へと高齢者を追い立てる計画です。各地域から報告をお願いします。



司会をする細川さんと中山さん(ともに20代)

○桑名地域(医療生協・寺崎由郎さん) 桑名市医師会機関紙「水郷」では、「急性期病床を減らせば莫大な医療費削減になる、これが政府の本音」と批判、桑名市の地域包括ケア計画も「死に場所難民」が生じると懸念の声が出ている。

○三河地域(看護師/あした葉代表・伊世利子さん)

調整会議へ参加している。最近の会議で「高度急性期の病床削減」が提案されたがまとまらなかった。「認知症など介護も議論しなければ」と提案したが、「福祉でやっているから」と言われがっかり。

○鈴鹿地域(三厚労委員長・畑中剛喜さん)

病棟機能報告制度の議論では、平成

記念講演

手をつないで社会保障充実の運動を

各地域の報告を受ける形で三重短期大学の長友薫輝先生が、「どうなる社会保障、手をつないで充実の運動を」と題して記念講演。そのポイントは次の通りです。

(臨時) 給付金の対象者は2400万人。生活保護200万人とあわせて人口の6人に1人が「貧困者」と政府が公式に判断していることになる。

社会福祉学科は国立大学にはない。なぜなら社会福祉学とはニーズを掘り起こし運動化することだから。

貧困は努力不足だと考える学生にはイス取りゲームで説明している。10人に対して正規のイスは6つしかない。座れないのは自己責任か？

国は社会保障における公的責任から「大脱走」をはかっている。医療費適正化(＝削減)は小泉政権の時から始まった。

福祉現場で、向き合う利用者に100%の力を注いでも現状は変わらないことを自覚しよう。変えるために余力を残しておこう。



政策によって作られたことは、「人の手を変えられる」。

生活保護の不正受給は1%に満たない。99%の受給者の実態が曲解されている。しかも生活保護は受けるべき人の18%しか受給していない。

政府支出は最低、自己負担は最高、それが日本だ。伊勢志摩サミットを機に先進国並みの水準へ。

社会福祉を経済政策の中心に据えることが必要。社会保障の経済波及効果、雇用誘発効果は公共事業より大きい。

長友先生のお話は内容豊かで面白く、とてもここに書ききれません。「人間の行動を変えるには、楽しいと思うことが大事。ドイツ・ニerlandやUSJのリピート率は高い。そういう運動を作っていく」と言われたのが印象的でした。

(編集/特別幹事 吉田一男)

2016年(平成28年)2月29日 月曜日 第13版

「住みたい場所で安心を」

議員・看護師ら200人考える集い

住みたい場所で安心して暮らせる地域をめざそうと、みえ労連などは28日、津市で「あすの三重を考える集い」を開いた。議員、農家、看護師などさまざまな職種約200人が集まり、長友薫輝教授(三重短期大学)による基調講演や、伊勢志摩サミットを契機に、日本を先進国並みの社会福祉水準にしようという目標を掲げた。

誰にも言えず表面化しないことを指摘、「行政は表に出ない問題に対策を立てない。地域ごとに生活問題を掘り起こして発信することが重要だ」と呼びかけ、「伊勢志摩サミットを契機に、日本を先進国並みの社会福祉水準にしよう」という目標を掲げた。

朝日新聞 2月29日付

28年診療報酬改定による影響、平成30年の医療・介護ダブル改定を控え、現時点での状況判断で病院の方向性を決定し、地域住民の医療・介護・生活を守るか、また病院で働く労働者の生活を守るか、国の施策に疑問を感じました。声を上げましょう。

○津地域(民医連事務局次長・藤井新一さん)

削減ありきは納得できない、中小病院で仲良くやってきたのに法人化して医療関係者を融通する提案はとんでもない、津地域の救急体制構築を議論すべきではとの意見が出ていました。

○伊賀地域(都合悪く発言なし)



○松阪地域(松阪市会議員・松田千代さん)

松阪中央・済生会・市民病院と3つの総合病院が医師会と連携して休日・夜間の輪番救急医療体制を構築し地域医療体制を築いてきた。県は第3回の「調整会議」で、急性期では812床の超過、慢性期では216床の超過だと大幅なベッド削減案を提示した。輪番救急体制が崩壊する県の案を再考するよう求める意見が出され、松阪市長も削減案に県へ抗議した。

○伊勢志摩地域(元日赤看護師・中村洋子さん)

先日の県のパブコメ44名の内14名が伊勢志摩地域から。「日赤の一極集中を回避して」「急性期の充実を」「志摩市で急性期を」などの声がある。調

整会議では、「たった3回で結論出さずか」など傍聴者からも異論が出た。

○東紀州地域(東紀州の医療介護をよくする会・笹の内克己さん)

尾鷲病院・紀南病院の2つが基幹病院。県は機能統合し病床を半減(921床464床)というが、車で1時間も離れているのに納得できないと審議会では全員反対。地域に医師はおらず在宅医療は不可能、東紀州を切り捨てるのか! 2市3町の首長と共同して運動する。

8つの分科会、1つの交流会

第2部(午後)は地域医療、高齢者、子育て、TTP、雇用・賃金、地域防災、地域公共交通、原発の8分科会と平和の交流会に分かれて話し合いました。写真は若者が参加した「平和の交流会」の様子です。

